

〈書 評〉

脳卒中の早期リハビリテーション これからの考え方と進め方

二木 立・上田 敏 [著]

渡辺 淳 (中通リハビリテーション病院)

第一線の医療機関での早期リハビリテーションの確立のために日夜情熱をかたむけている人々にとって待望の書が発刊された。

本書は、二木氏の十年間の貴重な実践を中心に、二木氏と上田氏との対話という形式でまとめられている。

その構成は、I. 序章 リハは救急から、II. 早期リハの実際、III. 一般病院のリハの運営、IV. 早期リハでえられた知見、V. 終章「人生の質」の向上をめざして、の五つの章から成っている。

本書を手にする人は、本書の冒頭と最後のページに掲載されている「はじめに」と「あとがき」から読み始めることを勧めたい。本書を発刊するに当たった著者たちのほんとうの意図や二木氏の実践の経過や背景が詳しく述べられている。

発刊の第一の意図は、これまでのわが国の脳卒中のリハビリテーションのありかたに対する厳しい批判である。

わが国の脳卒中のリハビリテ

ーションは患者の居住地から遠く離れた温泉地にあるリハビリテーション専門病院から始められたという歴史的経過の中で「脳卒中のリハビリテーション」というものを考える時の思考の原型、いわゆるパラダイムとでもいうべきものが、温泉病院でのリハビリテーションを基礎としてでき上ってしまっており、都市で現実「都市型（居住地近接型）リハビリテーション」に従事している人達ですらものの考え方は「温泉地型（遠隔地型）リハビリテーションに縛られている」、「形の上だけで都市の第一線病院で早期リハビリテーションを行うところが増えたり、都市型のリハビリテーション専門病院が増えたりしただけではわが国の脳卒中リハビリテーションの古い体質を変えるには不十分だということになる。形の変化に伴って、新しい考え方とやり方が確立され、それこそが価値あることなのだという新しい価値感が形成されるということ、つまり新しいパラダイムの確立がなければならな

い」との鋭い指摘をしている。

本書は、以上の批判の具体的な解答として発刊された。その解答の核心は「回復の法則性とそれに立脚した予後予測」のうえに立ったりハビリテーションの実践の重要性である。

発刊の意図の第二は、脳卒中のリハビリテーションの研究方法に対する批判である。従来の予後予測やリハの効果の研究方法には、①対象選択の偏りがあり、それを補正していないこと、②能力障害を予測するのに、それとレベルの違う機能障害が重視されてきたこと、③年齢の影響は指摘されていたが実証的には明らかでなかったことを指摘している。そして、これらの批判の解答は「脳卒中患者の障害の構造の研究」として本書の中で実を結んでいる。

本書は、二つの批判とその解答であると同時に、秀れて実践的な脳卒中の早期リハビリテーションの治療指針であり、リハ看護婦の役割の新しい解明やリハ部門の運営なども興味深い。

第一線の医療機関でのリハ関係者はもちろんわが国の脳卒中のリハ関係者にも広く、本書が読まれることを願う一人である。

(A 5判, 290 ページ, 図 26, 定価 3,700 円, 送料 300 円, 1987 年, 医学書院 刊)